

# 五大院安然と台密の系譜について

## 水 上 文 義

天台密教(台密)の特色は胎藏金剛兩部に蘇悉地を加えた三部の密教とする所にあり、胎金合糅の傾向が強い。台密の蘇悉地の相伝はいりまでもなく慈覺大師円仁の入唐求法によるもので、以来兩部の要妙に渉る大法として台密の秘伝とされた。円仁は蘇悉地経を、その疏の冒頭で「所<sub>レ</sub>言蘇悉地羯羅經者、是三部經王、諸尊肝心、緒<sub>三</sub>總真言之秘旨、該<sub>二</sub>貫大教之要妙<sub>一</sub>と定義し、從來の遮那・止觀兩業の年分度者に金剛界と蘇悉地の度者を加増せしめた。蘇悉地の伝法は更に貞觀十六年十一月に、時の天台座主円珍と阿闍梨遍昭及び承雲の三名の連署による蘇悉地起請状で「与<sub>三</sub>阿闍梨位<sub>二</sub>之後、可<sub>レ</sub>授蘇悉地大法<sub>一</sub>事、右大法者、為<sub>三</sub>胎藏金剛界兩部大法<sub>二</sub>之阿闍梨、是以唐大師等并我慈覺大師、殊秘<sub>三</sub>惜之<sub>一</sub>、不<sub>レ</sub>同他部、仍自今以後伝法者、須<sub>レ</sub>教<sub>三</sub>弟子<sub>一</sub>令<sub>レ</sub>登<sub>三</sub>阿闍梨之位<sub>二</sub>後方与<sub>レ</sub>授件法、若不<sub>レ</sub>然者恐損<sub>三</sub>大道<sub>一</sub>、故定如<sub>レ</sub>件」とて阿闍梨位を得た者でなければ伝法がなされない程に秘されたのである。

しかしながら、蘇悉地は特にその根本印や本尊が明確では

五大院安然と台密の系譜について(水 上)

なく、伝法の形式・内容も不分明なのである。そのことが台密の形成の上で後に様々な説を生むのであるが、その最も重大なのは安然の教説であろう。安然は蘇悉地は胎藏界の悉地法なのであり、それに金剛界の悉地法というべき瑜祇経を加えなければ全き都法の伝法はなしえないのである。こうした考え方が、後世の台密に瑜祇灌頂を生じ、それを秘伝中の深秘となしたことになるのではないかと考えられるのである。安然は教時間答卷四に「問、第五藏何、……一、金剛界秘密藏、二、胎藏界秘密藏、……或可<sub>レ</sub>言三藏、一、加<sub>三</sub>蘇悉地秘密藏<sub>二</sub>以<sub>三</sub>十八道<sub>一</sub>而為<sub>三</sub>紀綱<sub>二</sub>、与<sub>三</sub>前兩界<sub>一</sub>少差別故、又阿闍梨印信云、是兩界部大法之羽翼也、奉<sub>レ</sub>勅受<sub>三</sub>學兩部大法<sub>一</sub>、竟者方始授<sub>レ</sub>之、或言<sub>三</sub>四藏<sub>一</sub>、加<sub>三</sub>瑜伽瑜祇秘密藏<sub>二</sub>、謂蘇悉地經十八道雖<sub>レ</sub>異兩界、而三部同<sub>三</sub>胎藏界<sub>一</sub>、實是胎藏大法中之悉地成就法也、今金剛頂瑜祇經是可<sub>レ</sub>言兩部大法之肝心也、以<sub>三</sub>說<sub>二</sub>兩界阿闍梨位行法<sub>一</sub>故也、其中大悲胎藏頓証八字印明是大日經中阿闍梨真実智品印明、而明<sub>三</sub>五部三十七尊

法「実<sub>レ</sub>是金剛界中之悉地成就法也、故与<sub>レ</sub>蘇悉地法<sub>二</sub>相对是為<sub>二</sub>四藏……」と、その教説を述べ、蘇悉地が仏部、蓮華部、金剛部の三部立てであるのは胎藏界の悉地法に異ならないとして、より明確に両部を合釋しうる瑜祇經を相對させてくる。安然是瑜祇經を、その疏の冒頭で「此瑜伽中有<sub>二</sub>十二品<sub>一</sub>有<sub>二</sub>十四法<sub>一</sub>、是金剛界蘇悉地法、譬如<sub>レ</sub>胎藏蘇悉地經十八曼荼羅法<sub>二</sub>と定義し、卷二では「爾時<sub>レ</sub>仏母金剛吉祥復説<sub>二</sub>成就大悲胎藏八字真言<sub>一</sub>、若誦<sub>レ</sub>持<sub>レ</sub>一千万遍獲<sub>レ</sub>得大悲胎藏中一切法一時頓証<sub>云々</sub>、故知此<sub>レ</sub>仏母法成<sub>二</sub>就<sub>一</sub>一切明<sub>一</sub>、通能成<sub>二</sub>就<sub>一</sub>大悲胎藏三部秘法大金剛界五部秘法<sub>一</sub>、非<sub>レ</sub>如<sub>レ</sub>蘇悉地教三部真言各別成就不<sub>レ</sub>通諸部<sub>二</sub>と瑜祇經の両部に涉る機能を高く評価している。同様のことは金剛界大法対受記卷七にも、今のと同じ瑜祇經金剛吉祥大成就品を引いて「彼<sub>レ</sub>真實智品唯有<sub>レ</sub>布<sub>二</sub>八字<sub>一</sub>法<sub>一</sub>無<sub>レ</sub>印真言<sub>一</sub>、今此經中明白説<sub>レ</sub>之、故知金剛界中兼<sub>レ</sub>説胎藏極密究竟之法<sub>一</sub>、若不<sub>レ</sub>入<sub>レ</sub>此金剛界大阿闍梨位<sub>二</sub>則胎藏界大阿闍梨位終無<sub>レ</sub>由<sub>二</sub>成就<sub>一</sub>也、若不<sub>レ</sub>入<sub>レ</sub>彼胎藏界二檀大阿闍梨位<sub>二</sub>則金剛界大阿闍梨位終無<sub>レ</sub>由<sub>二</sub>具足<sub>一</sub>也<sub>一</sub>」という。すなわち両部各別ではなく、通じて機能を満足しえる悉地法を最上とし、胎金両部に通ずる阿闍梨位のみを都法と主張しているのである。それ故に瑜祇經を金剛界の悉地法として蘇悉地と相對させることにより台密の機能が十全となり得ると考えたのである。

この瑜祇經を重視することは、後世に至っては台密独自の瑜祇灌頂を生ずるのであり、また慈円が仏眼尊崇の根拠として安然の教説を基本としたこともすでに指摘されている。それでは、安然がこれ程に強調する瑜祇經の伝法が一体どうであったかといえ、それは余り明了にはなしえないのである。安然自身は金剛対受記卷七に「元慶八年十月十五日夜、中院与<sub>レ</sub>自然二人胎藏授位灌頂付<sub>二</sub>此無所不至印及三身説法印<sub>一</sub>、十六日夜、金剛界中付<sub>二</sub>大日三昧耶印<sub>一</sub>、於<sub>レ</sub>後別時<sub>一</sub>唯安然付<sub>二</sub>瑜祇經阿闍梨位印明<sub>一</sub>、又於<sub>レ</sub>別時<sub>一</sub>付<sub>二</sub>真實經三身印明<sub>一</sub>、此別時印不<sub>レ</sub>付<sub>二</sub>首阿闍梨<sub>一</sub>、竊檢<sub>レ</sub>瞿醯<sub>二</sub>唯教<sub>一</sub>一人授<sub>二</sub>与<sub>レ</sub>都法<sub>一</sub>不<sub>レ</sub>付<sub>二</sub>二人<sub>一</sub>、具如<sub>レ</sub>彼經<sub>一</sub>、推<sub>レ</sub>量師意<sub>二</sub>不<sub>レ</sub>可敢言<sub>一</sub>云々」として師の遍昭より唯授一人の秘法として瑜祇經阿闍梨印明を付法されたというのである。しかし、安然以前、円仁や安慧の頃には瑜祇經の相伝等は全く見えず、円仁、円珍の入唐相承にも全く名は見出せない。将来目録等によると、安然のいわゆる八家秘録では瑜祇經は空海、恵運、宗叡の将来であり、円仁の入唐新求聖教目録では青蓮院本にはあるものの、高山寺本には見えないのであるが、ただ金剛吉祥大成就品のみが抽出して将来されている。従って、諸尊法の一つとして相伝した可能性がある、という程の推測しかできない。

このように瑜祇經伝法の系譜は不明であり、それ故に後世の伝承も数説に別れるのである。例えば天台霞標五ノ一にあ

る伝円仁記、十三重灌頂秘録では惠果—義操—義真—円仁と相伝しており、慈眼大師全集所収の西山流瑜祇灌頂相承は惠果—義操—全雅—円仁とされ、台密十三流相伝では全雅—円仁説が多いものの惠果—慧則—元政—円仁の系譜をたてる流派もある、という具合に数種の相承説が見られる。ただ、このうち義操—全雅—円仁の相承は全く問題で、それは円仁自身が日本国承和五年入唐求法目録で全雅は弁弘の弟子であるといっているからである。また、三井の敬光の山家学則は「又、瑜祇灌頂ハ五大尊者入唐シテ伝ヘ玉ヒ、殊ニ台密ニノミ伝フル所ニテ……」と安然入唐相承説まで述べられている。かかる相承説の混乱は、台密の形成期にあつては瑜祇経は未だ教相の上に大きな比重を占めていなかったのではないか、と考えられるのであり、瑜祇灌頂の成立も、おそらくは平安末期のことではなからうか。従つて安然が遍昭より相承したという形式も、灌頂ではなく、単なる伝法であろうと考えられるのであるが、それを安然が唯授一人の秘法として宣揚していることは、台密の伝承の上にひとつの問題を提起することにもなるのではなからうか。さらにいえば、円仁が瑜祇経の中の金剛吉祥大成就品のみを将来しているということは、後世に金剛吉祥大成就品に基づく仏眼尊崇、台密の仏頂信仰の流れの中で、一体どのようにとらえるべき問題なのであろうか。

五大院安然と台密の系譜について（水 上）

台密の系譜の中で、遍昭と安然の位置する所とその教説には、さらに解明の必要な部分が多く残されているといわざるをえない。

- 1 三崎良周「慈覚大師の密教における一二の問題」（慈覚大師研究）。
- 2 三崎良周「慈鎮和尚の仏眼信仰」（密教文化、大山公淳教授古希記念号）、同「慈鎮和尚の密教思想について」（仏教史学十二ノ一）、多賀宗準「慈円の研究」。
- 3 小野勝年「入唐求法巡礼行記の研究」第四巻。
- 4 台密十三流の相承譜については、大正大学、木内堯央助教の御好意により拝見及び御教示を賜わった。  
なお、派によつては順晡が最澄に伝法した三種悉地の印信を瑜祇伝法と関係づけている場合もあり、稲田祖賢「五大院先徳安然和尚の相承について」（叡山学報第一輯）では、瑜祇灌頂は宗祖が順晡阿闍梨より之れを相承せられ更に慈覚大師が全雅元政二師に従い、長安城に於いて相承せられた事は巡礼記に明な所であつて、とあるが、この主張にはいささか混乱ないし錯誤があるようである。

（大正大学総合仏教研究所研究員）